

## 結語

以上、魚玄機の詩を通して、「恨」と「怨」の用法の異同とその創作方法としての小道具利用、及び分身比喻について論述した。特に、心情に関する言葉との関連で見た小道具利用について、例えば、「砧声」や「事」を用いた例では、それらが単に物事それ自体の意味を示すだけにとどまらず、作者の心情の表現にまで関与して、その心情の形や内容を暗示するものとして使われ、また、作者の恨みや孤独感を吐露した詩においても、小道具がそれらの心情を直接にむき出しにしないための、あるいは効果的に伝えるための役割として用いられている。つまり、詩語として詠みこまれる小道具は詩のイメージを形成するためのものであったと云える。また、韻文の一般的表現技法として用いられる分身比喻も、換言すれば、時や場所そのものの厳密な選択によって、作者自身を最も的確に、しかも象徴的に述べるための小道具利用的表現方法といえる。すなわち、作者が「情」<sup>おもひ</sup>を語る場合や、あるいは作者自身を比喻する場合のいずれにおいても、同様の表現方法が用いられているのである。このような表現方法は中国詩史上における一般的な技法といえるが、魚玄機の詩にも、現存作品のすべてを例示したわけではないが、多用されているという点において、彼女の詩の特色の一つにあげることができる。

注(2)

『全唐詩』(巻八〇四)

(中華書局)

注(3)

『詩語の諸相―唐詩ノート―』113頁

(研文出版)

注(4)

『右に同じ』245頁

(右に同じ)

注(1) 『魚玄機・薛濤』(漢詩体系15) 辛島 驍 (集英社)

睡覺莫言雲去處

睡覺言うことなし雲去りし処

殘燈一釭野蛾飛

殘燈一釭<sup>さん</sup>野蛾飛ぶ

(送別)

水柔逐器知難定

水柔かにして器<sup>うつわ</sup>を逐う 定め難きを知る

雲出無心肯再歸

雲出づるに心無し 肯て<sup>あえ</sup>再び帰らんや

惆悵春風楚江暮

惆悵<sup>ちうちよう</sup>す春風楚江の暮

鴛鴦一隻失羣飛

鴛鴦<sup>えんおう</sup>一隻群を失いて飛ぶ

(送別)

例一は、売れ残りの牡丹の花を自分に喩える。元来牡丹はきわめて高貴な花で、人も価を尋ねようとせず、香の高さに蝶すら寄って来ようともしないと述べ、「価高く、香甚だし」の語に、以前の自分の美しい容色と高い詩才を自負している。気位の高さと自信を誇示してみたものの、結局は売残の牡丹と同様の身だと己れの人生の哀れさを嘆いている。例二は、悲しい鳴き声をたてながら夕暮れの林の上をめぐり飛んでいる「暮雀」の姿に、現在の主婦として落ち着いた生活も定まらぬ不安で哀れな自己の分身を投影させている。「暮」や「空」の字によって作者は己れの人生を象徴的に語ろうとしているかのである。例三の詩句の「芙蓉」は、作者の兩頬の比喩であるが、芙蓉が鏡の中に開くという表現の中に、鏡に写った己れの容色の美しさ、華やかさを暗に示し、また、鏡に見入る作者のはれや

かな心情がイメージされる。例四は、俗世の幸せを願ったところでどうなるものでもない。結局人の身は不安定なもの、自分もまたとも綱の切れた小舟のように、何処までも水の流れのままに流されてゆくと、つまり、広い世間の中で、依るべき場所、頼みとする友もなく、漂流して留まることのない自分の運命を「舟」に喩え、境遇の哀れさを吐露している。例五は、自身を蕙蘭に喩え、その香り草が色香も消えて畑に捨てられるということ、己れの容色の衰えと、愛の消滅を嘆く心を示し、集散離合を繰り返す定まりのない雲のように、人の愛の裏切りに翻弄される自分を「雲」に喩えて、愛の無常を知った悲しみを歌う。例六では、情人に捨てられ、狂わんばかりの思いに苦しむ自分を、明けがたの消えかかる燈皿のまわりを飛ぶ一匹の野蛾に喩える。「殘燈」は作者の自己存在の不安の象徴でもあり、また、自分を託すのに、「野蛾」を選んだ所に、情炎に狂う魚玄機の自己認識がある。例七の詩は、「水」と「鴛鴦」を自分に喩えている。「雲」は玄機を身受けした李億を指す。水が方円の器に従うように、私もまた、あなたに従うだけで、独りで自分の身を定めることができないのに、あなたは二度と私の許に帰ることがない。群からはずれた一羽のおしどりが夕暮の川辺で悲しみ飛んでいることを述べる。「一隻の鴛鴦」に託して、情人に棄てられて、行く所もなく茫然自失の心境にある自分を象徴的に表している。

して、「夜」も「燈」も深まってゆく作者の孤独を、より効果的に訴えるために用いられた雰囲気形成の語といえる。例四は、冬の夜燈の下で詩作に苦勞している。夜長にもかかわらず眠りは浅く、しとねの中も冷えたまま、庭一面の木の葉が風に舞う音を聞くのはわびしい限り、透きとおった薄絹のとばりを下ろした絹貼りの窓から射しこむ月光もやがては消えてしまうもの、できるだけ長く射していて欲しいものだと言う。眠れない長い夜、冷えきってしまったふとんを恐れる作者の孤独感を歌ったものである。「寒」は、ひとり寝のさびしさの極まった状態を表現する。情人のいない悲哀をあらわに言い表さないで婉曲に表現するため、作者は「寒衾」という小道具を用いたのである。沈む月を惜しむ窓は作者の心であり、しかも、その窓を「透幌」、「紗」の語を以て形容している。いかにも作者の女性らしい感覚の繊細さを示している。愛する人に捨てられた人の、唯一の心の友である月光の移ろひを、「透幌」や「紗窗」を通して眺める所に、情愛にめぐまれない作者の孤独の姿がイメージされる。

#### 四

魚玄機の作品には、詩の表現技法として、詩句のある言葉や句全体が彼女自身を比喻するという、いわば分身比喻の用法がみられる。

應爲價高人不問 応に価高きが為に人間はざるべく

却縁香甚蝶難親

却<sup>かえ</sup>つて香の甚<sup>し</sup>だしきに縁<sup>よ</sup>つて蝶親しみ難し

(売残牡丹)

幽棲莫定梧桐處

幽棲定まるなし梧桐の処

暮雀啾啾空繞林

暮雀<sup>しゅうしゅう</sup>啾啾空しく林を繞<sup>めぐ</sup>る

(冬夜寄温飛卿)

滿庭黃菊籬邊折

滿庭の黃菊籬<sup>くた</sup>邊に折け

兩朵芙蓉鏡裏開

兩<sup>だ</sup>朵の芙蓉鏡裏に開く

(重陽阻雨)

安能追逐人間事

安<sup>いづ</sup>くんぞ能<sup>よ</sup>く人間<sup>じんかん</sup>の事を追逐せん

萬里身同不繫舟

萬里身は同じ繫<sup>よ</sup>がざる舟に

(暮春即事)

蕙蘭銷歇歸春圃

蕙蘭銷歇して春圃に帰り

楊柳東西絆客舟

楊柳東西に客舟<sup>つな</sup>を絆ぐ

聚散已悲雲不定

聚散已に悲しむ雲定まらざるを

恩情須學水長流

恩情須らく學ぶべし水長<sup>とこし</sup>へに流るるを

(寄子安)

見事な詩文も男性と対等に認めて貰えないという恨み、自分が女性であることに対する恨みを述べる。即ち、恨みを述べる場合において、その恨みを露骨に吐露するのではなく、扇や着物や寝台といった小道具を用いて、象徴的に自らの思いを表現している。

次に、空閨を守る作者の孤独の思いを述べる場合の小道具の使用法について考えてみる。

樓上新妝待夜

樓上新妝して夜を待ち

閨中獨坐含情

閨中独坐して情をし含ぶ

(寓言)

寶匣鏡昏蟬鬢亂

宝匣の鏡は昏くして蟬鬢乱れ

博山爐冷麝煙微

博山の爐は冷かにして麝煙微かすかなり

(和人)

洞房偏與更聲近

洞房ひと偏へに更声と近し

夜夜燈前欲白頭

夜夜燈前に白頭ならんとす

(愁怨)

苦思搜詩燈下吟

詩をもと搜むるに苦思して燈下に吟じ

不眠長夜怕寒衾

不眠の長夜寒衾をおそ怕る

滿庭木葉愁風起

滿庭の木葉風の起るを愁ひ

透幌紗窗惜月沈

透幌こうの紗窗そう月の沈むを惜しむ

(冬夜寄溫飛卿)

例一は、高殿で新たに化粧して夜の訪れを待ち、閨の中に独り坐って帰らぬあなたへの思いに胸を痛めていると詠う。「夜」とはよき人が訪れてくる夜であり、「樓」、「閨」も「含情」と関連して、男女の睦み合う場所を暗示している。この句は、「樓」、「閨」また「妝」が「夜」、「情」と関連して、ある統一された雰囲気醸し出し、恋人を待つて浮き浮きしている女と孤独さをじつとかみしめている女の情を効果的に表現している。例二は、鏡はみがかず、髪の手入れもなまけたまま、山形の香炉も冷えたまま、麝香の煙がわずかに立ち昇っていると詠う。「冷」や「微」は作者の頼るべき人もない孤独の思いやほのかな煙のように頼りない自分の身の不安や寂寞を象徴的に示しているものであるが、「炉」や「麝煙」もまた、そのような作者の心境を伝えるための小道具として用いられたものである。自分のさびしい心情を、あまり使用されることなく冷えきっている炉や、かすかな香の煙で表現しようとした作者の意図が窺える。例三は、独りで居るこの寝室に、時刻を告げる鼓の音が近く聞えてくる。幾夜も寂しさに燈の前で泣き明した私の髪は白くならうとしてしていると詠う。「洞房」は、ともに楽しい夜を過す人も居ない奥深い部屋、「更声」は、その部屋の中で悲しみに暮れる作者の「時」を恐れる心、「白頭」は、憂い哀しむ心の象徴である。そ

ると詠う。例五は、琴を弾いていると、その音色に従って益々仮住いの淋しさが身にしみると詠う。例六は、前漢の文人で琴の名手であった司馬相如のように、琴の上手なあなたは弾琴をやめ、琴糸もすっかり切れて、私への愛も途中で絶えてしまったと詠う。

以上の六例中の「琴」は、単なる楽器として用いられているのではなく、すべて作者自身の「情」に関わる小道具として使用されている。つまり、琴を弾くということは、愛人に対する思いを述べることを意味し、弾琴をやめる、あるいは、琴の音が絶えるということは暗に愛情の消滅を象徴する。「琴」、「弦」、「絲」を用いた詩句は全部で十二例あるが、その中で、「絲」が琴と関わらぬ意味、すなわち、柳や髪の比喩に用いられているものを除くと十例となる。ここに例示しなかったものは前述の六例に見られる程はつきりした意識をもって、「琴」の中に「情」の意味を託してはいないようである。しかし、詩全体から見ると、「情」の意味を含めて解釈できないこともなく、従って総括的には作者が「琴」を用いる場合には、その裏面に男女の情を暗示する意図が働いていると思われる。

元来、琴は風流な君子人が愛する楽器とされ、詩歌にも多く詠われてきた。しかし、六朝以後、詠物詩の題材の一つとして用いられ、専ら楽器としてのすばらしさや音色の美しさ、あるいは女性美や所作の優雅さなどを強調する器物として詠われる。一方、音色を哀切と感じる意識から、空閨を歎く女性を描くときにも用いられる。魚玄機も琴に対する過去のイメージの典型を意識しつつ、専ら愛の断絶の哀しさをかもし出す小道具として、

自らの作品に利用している。

さらに、玄機が恨みの心情を述べる場合にも、扇など女性らしい小道具を使っている。

唯應雲扇情相似　　ただまさに雲扇と情相似て

同向銀牀恨早秋　　同じく銀牀に向かって早秋を恨むべし

(酬李学士寄簾)

自恨羅衣掩詩句　　自から恨む羅衣の語句を掩ふを

舉頭空羨榜中名　　頭を挙げて空しく羨む榜中の名

(遊崇真觀南樓觀新及第題名処)

例一は、(あなたから戴いた夏用のベッドの敷ござも夏場かぎりのもので) 扇のように秋風が立つと棄てられるのではないかと思つて、早くも訪れた初秋を、添い寝もできなくなるであろう寝台に向つて恨んでいると詠う。

例二は、自分のうすものの着物が、詩人としての才能を掩つてしまつてるのが恨まれてならない。女でなかったら進士の試験に合格してみせるのだがと詠う。例一の句は、棄てられる自分を夏ござに喩え、また、愛が衰えて自分を棄てるかもしれない相手を秋に喩えて、寝台が早秋を恨むという表現で、そのような事態にならないように願うと自らの思いを婉曲に表現する。例二の句は、羅衣が掩うという表現で、女であることのために、

られたとのこと。しかし、私の夫は今だに帰って来ない。隣で夜なべに打つ砧の音が私の部屋のとばりの中まで聞こえてくると詠う。例二は、対岸の町に出かけて行ったまま戻って来ない夫を心淋しく思いながら、舟の中で詩を詠みつつ待っている。ほんの目と鼻の先にあなたがいるのは分っているのだけど、待つ身のせつない心では千里も遠く離れてしまっているような思いがする。まして、遠く近くの家で打っている砧の音を聞けば聞くほどの淋しさがつのるものと詠う。この二例の「砧声」は、帰らぬ夫を待つ主婦の寂しさの象徴というよりは、夫と暮らす幸せな家庭があり、そうした家庭の中で砧を打つ女の幸せ、夫婦の団欒といった雰囲気を示すものとして用いられている。つまり、玄機は「砧声」を従来の典型のイメージでとらえるのではなく、むしろ家庭的な暖かさの象徴と見ているようである。こうした視点から、反対に寒々とした閨の中で、あるいは、夕暮の淋しい川岸につなぐ舟の中で聞いている玄機にとって、より孤独感が強まっていくことになる。

舜琴將弄怨飛鴻

舜琴<sup>かな</sup>弄<sup>す</sup>でんと將<sup>す</sup>るも飛鴻を怨む

(情書寄李子安)

蕭湘夢斷罷調琴

蕭湘夢断えて調琴を罷<sup>や</sup>む

(次韻西鄰新居兼乞酒)

朱絲獨撫自清歌

朱絲独り撫でて自ら清歌す

(秋思)

恨寄朱弦上

恨は寄す朱弦の上

(感懷寄人)

瑤琴寄恨生

瑤琴 寄恨生ず

(寄飛卿)

相如琴罷朱弦斷

相如琴を罷<sup>や</sup>めて朱弦断つ

(左名場自沢州至京使人伝語)

例一は、子安の居ない独り居の淋しさをまぎらわすために、琴を爪弾いてみるが、何時のまにか「怨飛鴻」の曲となってしまう、あなたの許におとりのように飛んで行けない己の身をいらだたく思っていると詠う。例二は、古代の聖天子舜の死後、堯の二人の娘は彼を慕って瀟水や湘水の女神となったというが、彼女たちのようにかの人<sup>ひと</sup>に会いたいという思いも夢のように消えてしまい、自分の思いを伝えるための弾琴も空しくなつてやめてしまったと詠う。例三は、琴の赤く染められた絃を爪弾くように、私も自分の思いを心の中で爪弾きながら、ひとり清らかな歌をうたっていると詠う。例四は、あなたへの恨みの思いを琴の音に託しながら奏でい

めには、それなりの表現技巧が要求される。ということとは、詩語が、それ自体の意味のほかに、その言葉のもつ「匂い」によって詩全体をある統一した雰囲気の形成や場面の設定をする必要がある。中国の古典詩においては、この雰囲気の形成や場面の設定には、一般的に季節や時間あるいは場所や器物など、より具体物、具象物を詩語として用いる場合が多い。この点については、松浦友久氏は、

たとえば、「散る」「消える」という動作を修飾し規定する場合、それらは単に、「まったく」「すっかり」「完全に」といった抽象的な副詞によって修飾されるのではなく、可視的な存在物としての「雲」や「霧」、それが消えていくさまに即して具体的に修飾される。つまり、そのような具体物・具象物に即した表現が、表現感覚の基調として好まれているわけである。同様に、「白い」「黒い」「赤い」といった色彩の強調も、抽象的に「非常に白い」「きわめて黒い」「まっ赤だ」と言うよりは、「雪白―雪のように白い」「烏黒（漆黒）―カラスのように（ウルシのように）黒い」「血紅―血のよう（<sup>4</sup>）に赤い」と表現するのが好まれる。といわれる。

つまり、物それ自体を詠うというよりも、その言葉の持つイメージの力を借りて、作品にあるイメージを盛り込んだり、作者の心情をより効果的に他者に伝える表現技法である。魚玄機も詩作の過程において、かなり意識的に具体的な言葉を詩語として、自らの心情を吐露している。

そこで、具体的な詩語として使用した言葉を、ここでは「小道具」と呼

び、具体例として、「砧」、「琴」、「扇」、「牀」、「羅衣」、「寢具」およびその他を通して小道具利用の方法について述べてみる。

藤蕪盈手泣斜暉  
聞道鄰家夫婿歸

藤蕪<sup>ひが</sup>手に盈<sup>み</sup>つるも斜暉に泣く  
聞道<sup>きくならく</sup>隣家に夫婿<sup>せう</sup>帰ると

……………

扃閉朱門人不  
到砧聲何事透羅幃

朱門<sup>とぎ</sup>を扃閉して人到らず  
砧<sup>ちん</sup>聲は何事ぞ羅幃を透す

（閨怨）

江南江北愁望  
相思相憶空吟

江南江北愁い望む  
相思相憶空しく吟ず

……………

含情咫尺千里  
況聽家家遠砧

情<sup>しの</sup>を含んでは咫尺<sup>しせき</sup>も千里  
況んや家家の遠砧<sup>しん</sup>を聴くをや

（隔漢江寄子安）

秋夜のもの悲しい雰囲気を表す風物の一つに、冬着の仕度をするために打ち鳴らされる砧<sup>きねた</sup>の音がある。これは遠く旅に出ている夫の無事な帰りを待つ女性の寂しさ、哀しさをイメージするのが六朝詩以後の伝統である。それに対して、例一は、人のうわさによると隣の家ではご主人が無事で帰

を爪弾いてみれば、知らず知らずに「飛ぶ鵲はうらめし」の曲をかなでており、飛べない我が身をいらだたく思うばかりであるというのである。すぐに戻って来るといつて出かけた愛人の子安が仲々返って来ない情況のもとで、一人待ちわびている有様を「怨」で表現している。

あとの二例は、「閨怨」、「秋怨」という詩題として用いられている。「閨怨」の詩は、帰って来るはずの夫がなかなか帰って来ず、ただひとり秋の夜長を冷たい床の中で寝もやらず歎いている女の姿を詠う。「愁怨」の詩は、月の光が冴えわたる秋の夜、訪れて来ない情人を奥の部屋でひたすら待つ女の情欲のうずきにもだえる姿を詠うものである。

以上、前述してきたように、魚玄機は自らの思いを吐露するのに、専ら「恨」を用い、「怨」をほとんど用いていない。もし、この両字の語義や用法が一般的に共通するものであるならば、どちらか一方を偏重するということは理解に苦しむ。やはり、魚玄機は意図的にこれらの語を使い分けていると思われる。つまり、「恨」と「怨」の両語は、その用法などに相異があると見てよさそうである。この点について、松浦友久氏は、

怨と恨の異同については、結局、それぞれの概念の中核部分を、以下のように規定するのが妥当だと考えられる。

「怨」Ⅱ（物ごとの）実現可能性が自覚されながら、それが実現されないことに基づく不満、憤懣。

「恨」Ⅱ（物ごとの）解決不可能性・回復不可能性への自覚に基づく無念さ・悔恨。

両者の差異は、むしろ対比的でさえある。たんなる互訓的な解釈や程度の差に還元しえないことは、おのずから明らかであろう。<sup>(3)</sup>と論述されている。

前述したように、魚玄機の「恨」の用法は、松浦氏が論述されているように、その大半は二度と元に戻らない、解決あるいは回復の不可能さを自覚した無念さや悔恨あるいは哀切を吐露するものである。

その理由は、次のように考えられる。

玄機は生来才能に恵まれ、成長段階で詩的教養を身につけ、それを己れの自負心として生きようとした。しかし、士大夫階級の子女でさえ、一般的に社会的文化的活動が抑圧されていた唐代において、娼家の出身である女性はいうまでもなく正常な婚姻関係を結ぶすべもなく、専ら遊蕩の対象にすぎなかった。そのため、情人の心変りを常に恐れながら、日陰の身として過ごさざるを得なかった。玄機も再三情人に裏切られ、その都度彼女の人に対する真剣な恋情は中断し、一度切れた糸はもう二度と結ばれることはないという自覚のもとで、深い悲哀に涙するしかなかった。彼女が詩中で「恨」をより多用した要因はまさにこの点にあったといえよう。

### 三

一定の字数制限のある詩型を用いて、例えば心情表現に関する創作を行う場合、作者の心情をより効果的に、あるいは印象的に相手に伝達するた



新たに進士に合格した人が、他界した妻のことを悲しんで詠んだ詩を贈られたので、それに和韻した作である。朝露に濡れている花を見れば、二度と戻ることのない亡妻の涙にぬれた面影や晚風にゆれる柳を見て眉をしかめているときのことを思い出されることであろうと述べ、死という現実が「恨」の原因となっている。

自恨羅衣掩詩句

自ら恨む羅衣の詩句を掩ふを

舉頭空羨榜中名

頭を挙げて空しく羨む榜中の名

(遊崇真觀南樓觀新及第題名処)

道教寺院の南樓に新進士の名前が貼り出されているのを見て詠んだ作。どのように立派な詩を作ってみた所で詮女(せんじょ)の身、進士の試験に合格することは絶対にあり得ないということが「恨」の原因である。

放情休恨無心友

放情恨むことを休む無心の友

養性空拋苦海波

養性空しく抛つ苦海の波

(愁思)

人の心がわからぬ薄情な男のことなんかすっかり忘れて、もう二度と口惜しいなんて思わないことにして、道教の教えを守って、この俗世の苦惱から解脱したいと努力してみるものの、煩悩にとらわれてなかなか思うに

まかせないと述べる。決して縊(より)が戻ることはないとは分つていても、未練が残る女心が「恨」の原因である。

西山日落東山月

西山には日落ち東山には月

恨想無因有了期

恨想す了期あるに因無きを

(代人悼亡)

月は東に日は西にと、このくり返しは永遠に続くが、それと同様におまえを喪った悲しみも終りがなく、永久に解消することのない悲哀の自覚が「恨」の原因である。

以上、玄機(げんき)の詩に用いられている「恨」の字十一例のうちから七例を取りあげて、その用法について言及してみた。

次に、「怨」の用法について述べてみる。

秦鏡欲分愁墮鵲

秦鏡分たんと欲するも墮鵲を愁ひ

舜琴將弄怨飛鴻

舜琴(かな)弄でんと將(まさ)るも飛鴻を怨む

(情書寄子安)

鏡の裏に彫つてある鵲に頼んで、鏡の半分をかの人(ひと)の所に運んで行ってもらいたいと思うが、かの人(ひと)の故里(こり)は遠く、途中で落ちて手元に届かぬのではないかと心配している。さらに、独り居(ひとり)の淋(しみ)しさをまぎらわそうと琴

## 二

玄機の詩に使用されている「情」つまり「思い」に関する用語は、例えば、「愁」十五、「情」十二、「恨」十一、「心」九、「憐」・「想」・「意」・「怨」三、「歎」・「憶」二等がある。このような用語の中で、特に別離や悲恋など人間の深く重い情念を表わす詩語として、「怨」と「恨」がある。玄機の四十九首中、「恨」は十一例用いられているが、「怨」は三例のみである。

例えば

自能窺宋玉

自らよく宋玉を窺ふ

何必恨王昌

何ぞ必ずしも王昌を恨まん

(贈鄰女)

あなたが宋玉(紀元前三世紀頃の楚の国の詩人で美男子であった。それ故隣の女がよくのぞき見たといわれる)のような立派な方であると思つたので、自ら望んであなたの妾となったのである。だから、あなたに棄てられた今でも他の男の所に嫁げばよかったなんて思ってもいないと詠う。ここで「恨」の原因となっているのは、情人の愛が冷めてしまったとはいえ、今まで内縁関係にあった状態をそれ以前の状態に二度と戻すことは不可能であるとの自覚である。

及至移根上林苑  
王孫方恨買無因

根を上林苑に移すに至るに及び  
王孫まさに恨まん買うに因<sup>よ</sup>無きを

(売残牡丹)

天子の御苑である上林苑に根が移し植えられてしまったならば、いかに貴公子といえども二度と買い求める方法はないであろうという意味であるが、ここでの「恨」の原因は買い戻すことが全く不可能であるということによる。

唯應雲扇情相似

唯まさに雲扇と情相似て

同向銀牀恨早秋

同じく銀牀に向つて早秋を恨むべし

(酬李学士<sup>てん</sup>寄簾)

秋風が立てば扇と同様不用の物として、この敷ごぎも押入れの奥深くに仕舞われてしまうことだろうという。一度仕舞われてしまうと、もう二度と取り出して使われることは無いというのが「恨」の原因である。

朝露綴花如臉恨

朝露花を綴れば<sup>まふた</sup>臉恨むが如く

晚風敲柳似眉愁

晚風柳を<sup>そはた</sup>敲つれば眉愁ふるに似たり

(和新及第悼亡詩二首)

# 魚玄機の詩

矢 嶋 徹 輔

## 賣殘牡丹

臨風興歎落花頻

芳意潛消又一春

應爲價高人不問

却緣香甚蝶難親

紅英只稱生宮裏

翠葉那堪染路塵

及至移根上林苑

王孫方恨買無因

風に臨んで興歎す落花の頻なるを

芳意潜かに消ゆ又一春

応に価高きが爲に人間はざるべく

却て香甚だしきに縁<sup>よ</sup>つて蝶親しみ難し

紅英只<sup>かな</sup>稱ふ宮裏に生<sup>い</sup>きるに

翠葉<sup>な</sup>ぞ堪えん路塵に染まるを

根を上林苑に移すに至るに及び

王孫<sup>ま</sup>方に恨まん買ふに<sup>む</sup>無きを

この詩は、晩唐の初期、長安の妓家に生まれた女流詩人魚玄機<sup>(1)</sup>の作である。玄機は芸者屋の娘として生長し、年頃になると芸者の定めとして、有産階級の囲い者となった。やがて破局を迎えるや、再び第二の愛人を得、

その愛人を侍女に奪われそうになると嫉妬に狂い、侍女を殺して二十数歳という若さで刑場の露と消えた人物である。元来、旧中国において、女性には例えば文学的教養を身につけたとしても、それを公にする機会に乏しく、後世の文学史上に名を残した女流詩人は非常に少ない。玄機が今日女流として名を残しているのは、それだけ文学的な能力に恵まれていたことによるのは云うまでもないことであるが、花街出身であつたことも関係がある。商業が発達した唐代では地方の都市も大いに賑わい、妓楼が社交の場として繁栄した。それ故、客の相手をする妓女たちも文学の素養をある程度身につける必要があつた。詩文の才が世に伝われば著名な官僚や文人との交流の機会も多くなる。玄機も当時の有名な詩人温庭筠と交遊している。温との交りがまた彼女の詩才をみがく力となつたと考えられる。同時にまた、文学的な情熱をあるがままに表現することを抑圧されていた当時の知識人の子女と異なり、身分的な桎梏にとらわれることなく、金と色という人間の欲望の世界を見て成長したことが、冒頭の詩に表白しているような自らの強烈な個性を詩の世界にて展開させることが可能であり、こうした点が後世に名を残す要因となつたのである。

魚玄機の詩は四十九首<sup>(2)</sup>現存している。その詩の大部分は自らの心情を吐露する抒情的なものである。特に彼女の境遇から愛を詠う作品が三十首ほどを占める。

この小論では、魚玄機の愛情詩を中心に、「情<sup>おもひ</sup>」の表現とその技法の特色について論述するものである。